筑紫女学園大学リポジト

比喩表現としての助数詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/46

比喩表現としての助数詞

緒　方　隆　文

Japanese Numeral Classifiers as Figurative Expressions

Takafumi OGATA

１．はじめに

本稿では助数詞は、比喩表現の一種であると主張する。というのも助数詞は、比喩と同じプロセスで生成されるからである。ここでいう比喩は、緒方（2011b）の分析をもとにしている。そこでは比喩（メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ）は、２つのプロセス、同一化と焦点推移によって成立するとした。つまりこれら比喩は、別々のものを同じとみなして（同一化）、より目立つ方に表現を置き換える（焦点推移）の表現と考えた。助数詞もまた、この２つのプロセスを用いて生成されることを示していく。

対象とする助数詞は、飯田（2004：330-397）の〈助数詞・単位一覧〉にある570項目の助数詞とする。これを資料等も参照しながら、意味に応じて770ほどに小分けし、分類を行った。結論から述べれば、助数詞はすべて２つのプロセスで生成され、その生成方法によって大きく５つに分類される。この分析で重要な働きをするのが、カテゴリーである。比喩と同様に、助数詞でも、２つのプロセスにカテゴリーが深く関わっている。もっといえば、助数詞の機能は、カテゴリータイプの推移・再確認を行うことにある。数えるためには、数えることができるカテゴリータイプでなければならない。それを行うのが助数詞といえる。以下の構成は、基礎となる比喩分析（緒方 2011b）を２節でまず見る。そして３節で、名詞のカテゴリータイプを通して、可算を考察する。４節で助数詞の全体像を示し、５節から９節まで５つの分類を１つずつ見ていく。

２．比喩表現

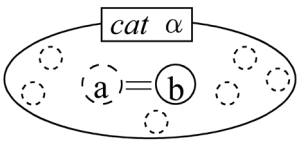
緒方（2011b）は比喩表現（メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ）をカテゴリーの観点から分析する。比喩はカテゴリーと深く関わりながら、２つのプロセス（同一化と焦点推移）を経て比喩が生まれると主張した。比喩は置き換え表現の一種である。別々のものを同じとみなして（同一化）、より目立つ方に表現を置き換える（焦点推移）。

２つのプロセスはカテゴリーが深く関わることから、まずはカテゴリーを考察したい。ここでのカテゴリーは、単に他と区別される集合体と考える。広く認知されたカテゴリーから、その場限りの一時的なカテゴリーまで入る。またカテゴリー自体の特性の違いもある。カテゴリーにはフレーム的なものから、個体的なものまで存在すると考える。フレーム的とは、フレームも含め、カテゴリーラベルに関連するものの集合体になる。成員同士、ひいては成員とカテゴリーラベルの結びつきは比較的弱い。一方個体的とは、個体ではあるが主観的に成員を見いだすもので、それもまた成

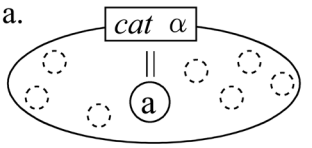
員を持つカテゴリーと考える。カテゴリーラベル(全体)と成員(部分や属性)の結びつきは極めて強いため、通例のカテゴリーと区別して個体カテゴリー(individual category：以下ind cat)と呼ぶ。

さて比喩に話しをもどしたい。比喩では、同一化と焦点推移という２つのプロセスがおこるが、関わるカテゴリーの数が、１つの場合と２つ以上の場合がある。前者をSingle CF(単一カテゴリー比喩)、後者をPlural CF（複数カテゴリー比喩）と呼ぶ。Single CFの場合、カテゴリーが１つなので、同一化は、成員同士でおこるか[成員ａと成員ｂ]((１))、成員とカテゴリーラベルの間でおこる((２))。(２a)は通例のカテゴリー([catαと成員ａの同一化])、(２b)は個体カテゴリーになる([ind catαと成員ａの同一化])。同一化によって互いが同じとみなされるため、表現の置き換え、すなわち焦点推移が可能となる*1。(１)では、成員ａからｂへと焦点推移がおき、成員ａを成員ｂで表現する。また(２)ではカテゴリーの特性に違いはあるが、どちらも焦点推移は２種類ある。一つは〈上への焦点推移〉で、成員ａからカテゴリーラベルαへと焦点推移し、成員ａをラベルαで表現する。もう一つは〈下への焦点推移〉で、カテゴリーラベルαから成員ａへと焦点推移させ、ラベルαを成員ａで表現する。ここで(１)のように同レベルの焦点推移を〈横の焦点推移〉、(２)のように異なるレベルでの焦点推移を〈縦の焦点推移〉と呼ぶこととする。〈縦の焦点推移〉は、〈上への焦点推移〉と〈下への焦点推移〉に細分される。(１)の例を(３)に、(２a)の例を(４)に、(２b)の例を(５)に示す(〈　〉内は指し示すものを表す)。従来のメトニミーが(１)と(２b)に、シネクドキが(２a)におおまかに対応する。

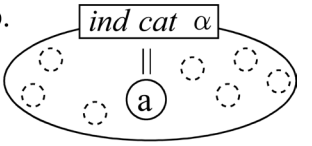
(１)



(２) a.



b.



(３)〈どんぶりの中の料理〉：私は<u>ドンブリ</u>が好きだ。〈やかんの中の水〉：<u>やかん</u>が沸いた。

(４) a．[上への焦点推移]〈桜〉：<u>花</u>見に行く。〈卵と鶏〉：<u>親子</u>どんぶり

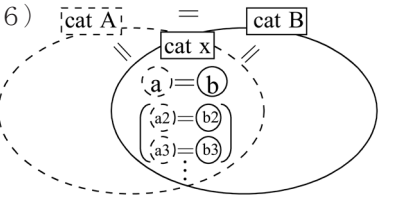
　　b．[下への焦点推移]〈食事〉：今日の<u>ご飯</u>は何。〈食べ物〉：人は<u>パン</u>のみにて生きるにあらず。

(５) a．[上への焦点推移]〈羽〉：<u>風車</u>がまわっている。〈テレビの音量〉：<u>テレビ</u>を小さくして。

　　b．[下への焦点推移]〈人〉：<u>人手</u>が必要だ。〈人〉：<u>茶髪</u>は雇いません。

次にPlural CF（複数カテゴリー比喩）を見ていく。カテゴリーの数は複数といっても、通例２つになる。そして２つのカテゴリーは、共通部分(成員同士が同一化されるところ)で重なる。同一化は(６)に示すように、一見３つある。一つはカテゴリーの共有部分における成員同士の同一化（成員ａと成員ｂ)、二つめはカテゴリーラベル間での同一化（cat Aとcat B)、三つめは成員とカテゴリーラベルの同一化(cat Aと成員ａ，cat Bと成員ｂ)である。

(６)



しかしSingle CFと同様、前の２つは同一レベル間の同一化なので、〈横の焦点推移〉と考えられる。成員間とラベル間で２種類あるが、これらは常に連動する。成員間の同一化(成員ａと成員ｂ)があれば必ずラベル間(cat Aとcat B)でも同一化がおこる。そのため１種類と考える。一方成員と

カテゴリーラベル間の同一化（cat Aと成員ａ，cat Bと成員ｂ）による焦点推移は、〈縦の焦点推移〉になる。よってSingle CF、Plural CFどちらにおいても焦点推移は２種類、縦と横の焦点推移がある。しかしながらPlural CFの場合、同一化されたすべてにおいて、必ずしも焦点推移がおこらない。比喩全体の中で、少なくとも１カ所で焦点推移が起こりさえすればよい。よって表現は多様なものになる。このPlural CFは従来のメタファー・シミリに大まかに対応する。例を（７）に示す。

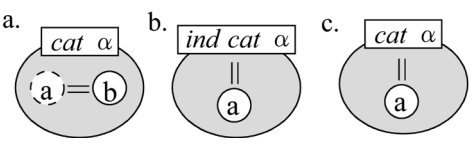
（７）ａ．きれいなバラ（cat B）にはトゲ（成員ｂ）がある。［横の焦点推移：cat A → B；成員ａ → ｂ］

　　ｂ．さとこ（cat A）はまるで天使（cat B）だった。　　［縦の焦点推移：成員ａ, ｂ → cat A, B］

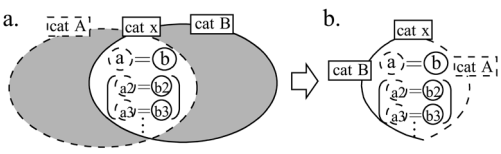
詳細な分析は緒方（2011b）に譲ることとして、ここでは次のことを確認しておきたい。１．比喩はカテゴリーにおける、同一化と焦点推移の２つのプロセスによって成立する。２．カテゴリーは１つのみのSingle CFと、複数カテゴリーを用いるPlural CFの２つがある。３．焦点推移は縦と横の２種類ある。４．カテゴリーは個体からフレーム的なものまで、広く認知されたものから一時的なものまである。この４点は基本すべて助数詞に当てはまる。このことを以下示していく。そして結論として、助数詞は比喩表現の一種であることを述べていく。

最後に死んだ比喩について考察したい。慣用化が進むと、比喩とは感じられなくなりいわば死んだ比喩になる。緒方（2011b）では死んだ比喩は、（８）（９）に示すように、同一化するもの以外が背景化される。表現が固定化され、他の成員が見えない形で強く結びついている。結びつきが強いため、同一化のプロセスが感じられない。そのため２つのプロセスがなされたように感じられず、比喩らしさがなくなる。（８）はSingle CF、（９）はPlural CFの死んだ比喩になる。

（８）



（９）



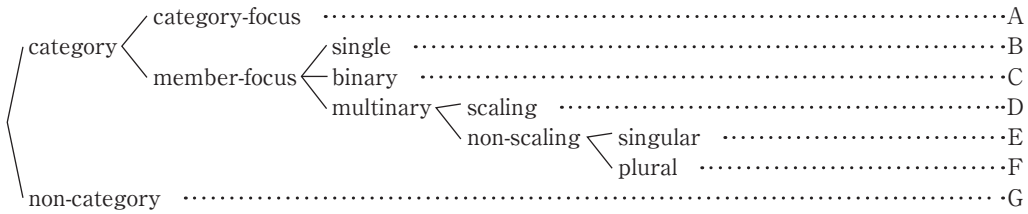
これは助数詞においてもあてはまる。慣用表現となった助数詞も、（８）（９）と同様に同一化されるもの以外が、背景化される。つまり表現が固定化し強く結びついているため、同一化のプロセスが感じられない。そのため比喩らしさがない。慣用化された助数詞は、すべて死んだ比喩になっている。しかし助数詞の生成過程においては、２つのプロセス、同一化と焦点推移が働いている。

３．可算・不可算

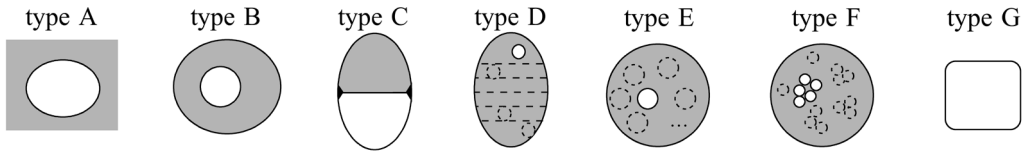
助数詞は数えるための表現である。数える対象の名詞には可算・不可算の区別があるため、そのままでは可算だけを数えるかに思える。しかし本来数えることができない名詞であっても、助数詞をつけることで数えることができる。例えば〈醤油〉は物質名詞でもともと数えられないが、助数詞［瓶（びん）］［匙（さじ）］などを用いることで数えることができる。そのため助数詞を考察するにあたり、まず数える対象の名詞の可算・不可算を考える必要がある。

可算・不可算を考察するにあたって、緒方（2011a）の分析を用いる。そこでは名詞を７種類のカテゴリータイプに分類する（(10)）。そして可算・不可算はカテゴリータイプによって決まると考える。(11)の図は、各々のタイプに対応している。楕円はカテゴリーを、楕円の中にある小円は成員を表す。白い部分に焦点があたっており、灰色は背景化された部分になる。

(10)



(11)



分類を一つずつ見ていく。まず名詞はカテゴリーと関連するかしないかで分けられる。カテゴリーは属性を中心としてまとまった集合体である。そのため属性によりまとまっていれば、カテゴリーと関連するとみなされ、カテゴリータイプ（A-F）になる。一方属性と関係がなく、対象と名前が直接結びついていれば、非カテゴリータイプ（G）となる。Gには固有名詞が含まれる*2。カテゴリータイプはさらに、カテゴリー焦点（A）と成員焦点（B-F）に分けられる。カテゴリー焦点とは、カテゴリーの外側を背景化するために、カテゴリー全体が前景化される。カテゴリー全体に焦点があたるので、中の成員は主観的に見えない。カテゴリーの外を背景化するので外部背景化と呼ぶ。典型的な物質名詞、抽象名詞がここに分類され不可算名詞になる。一方成員焦点とは、カテゴリー内部で背景化がおこる。カテゴリー内の別成員を背景化し、一部の成員を前景化する。カテゴリーの内部を背景化するので内部背景化と呼ぶ。このとき、カテゴリー内の成員は一つ一つ個別化しており、各成員は見えている。そしてさらに成員焦点は、カテゴリー内の成員の数によって分けられる。１つ（B）、２つ（C）、３つ以上（D-F）がある。３つ以上はさらに、尺度あり（D）、尺度なし（E, F）で分けられ、尺度がない場合は前景化される成員が一つ（E）か複数（F）かによって分類される（詳細は緒方 2011a）。この数・尺度はあくまで主観的な見方によるものになる。

可算用法は、成員が見える成員焦点でかつ複数成員を持つものになる。ただしタイプDは、１個・２個と総数を数えるのではなく、順番つまり序数になるため可算用法ではない。そのため（10）でいえばC, E, Fのタイプになる。数えるという観点から言えば、助数詞はタイプC, E, Fの名詞のみにつくかに思えるが実際はそうではない。例えば、砂糖はタイプAに通例属するが、２匙など助数詞をつけて数えることができる。助数詞は可算名詞のみに用いられるわけではない。

そこで助数詞とは何か、という本質的な問いに立ち返りたい。助数詞は、数えるための表現である。数えるには２通りある。一つは純粋にいくつあるかという総量を数える場合、もう一つは順番を数える場合である。総量を数えるためには、数えることができるカテゴリータイプでなければならない。よって可算用法のタイプC, E, Fになる。一方順番を数えるには、そこに序列を決める尺度が必要になる。カテゴリータイプはDになる。よって助数詞はカテゴリータイプC, D, E, Fに付加する。逆に言えば助数詞で数えるとき、名詞のタイプがC, D, E, Fと見なされる。そのためもとの名詞が、これらタイプである必要はない。助数詞が付くことで、これらタイプになればよい。水などの物質名詞を数えることができるのも、助数詞によってカテゴリータイプが変わるからである。そのため

助数詞とは、対象とする名詞のカテゴリータイプを、カテゴリータイプC, D, E, Fに変える、ないしは再確認する表現と考えることができる。

ここで日本語ではなぜ助数詞が豊かなのかを考えたい。それは日本語は「もの」への見方が、カテゴリータイプAを基本とするからと考えられる。つまりカテゴリーの外部を背景化し、あたかも物質名詞をみるかのようにとらえるのを基本とする。たとえ[本]など数えられるものであっても、[本という特性をもったもの] というカテゴリー焦点としてとらえる。そのため、そのままでは数えることができない。よって助数詞が必要となる。助数詞を使うことで、名詞を数えることができるカテゴリータイプへと変換したり、再確認するのである。一方英語はタイプEを基本とする。そのため助数詞を用いて、カテゴリータイプを変えたり再確認する必要が基本的にないのである。

４．助数詞

２節、３節で述べたことをもとに助数詞の全体像をみていきたい。助数詞は、名詞を数える為の表現である。数えるためには、カテゴリータイプの変更または再確認が必要と３節で述べた。この変更または再確認は、２つのプロセス(同一化と焦点推移)によって行われる。逆に言えば２つのプロセスを通して、助数詞は生成される。２つのプロセスは、カテゴリーを通して行われる。そこでは、１．焦点推移の種類、２．同一化の特性、３．カテゴリーの数によって分類することができる。(12)でまず全体を示したい。(12)ではまずカテゴリー全体が前景化、つまり中の成員全体が見えていなければならない。これは死んだ比喩と対照をなす。つまり他の成員が見えている状態で、２つのプロセスがおこる。焦点推移は、比喩と同じく〈横の焦点推移〉と〈縦の焦点推移〉がある。そしてさらに同一化がどこでどのような理由でおこるかで分類される。カテゴリー数は、Single CF か Plural CFの区別になる。そしてａからｅまで大きく５種類に分けられる。以下カテゴリータイプと区別するため、助数詞のタイプを［助数詞ａ,ｂ,ｃ,ｄ,ｅ］と呼んでいく。小分けした用法にもとづき大まかな割合を述べると、ａが１割、ｂが3.5割、ｃが0.5割、ｄが２割、ｅが３割あたりになる。

(12)

前景化	焦点推移	特　性	カテゴリー数	分類
カテゴリー全体を前景化	横の焦点推移（同レベル）	成員間	Single CF	a
		成員間＋カテゴリーラベル間	Plural CF	b
	縦の焦点推移（成員とカテゴリーラベル）	不可分性	Single CF	c
		典型性	Single CF	d
		同一性	Single CF	e

より具体的に見ていくと、まず〈横の焦点推移〉に助数詞ａ，ｂがある。助数詞ａは、単一カテゴリーにおいて成員間の同一化がおこる(Single CF)(cf.(1))。一方助数詞ｂは、複数カテゴリーにおいて成員間の同一化及びカテゴリーラベル間の同一化が連動した形でおこる(Plural CF)(cf.(6))。助数詞ｂで注意しなければならないのは、同一化がおこれば必ず焦点推移が起こるわけではない。成員間とラベル間の２カ所で同一化がおこるが、焦点推移はどちらか一方だけでもよい。２つのプロセス(同一化と焦点推移)が、生成過程において起こっていさえすればいい。成員に焦点推移が起これば、推移先の成員が助数詞となり、カテゴリーラベルに焦点推移がおこれば、推移先のカテゴリーラベルが助数詞となる。

次に〈縦の焦点推移〉の場合、成員とカテゴリーラベル間で同一化がおこる（cf.(2))。すべて

Single CFで、同一化の理由により分類されるc。助数詞cは、不可分性により同一化がおこる。カテゴリーは個体カテゴリーで、成員とカテゴリーラベルが不可分の関係になっている(cf.(2b))。強い結びつきであるためラベルと成員が同一視され、焦点推移がおこる。次に助数詞dは、典型性により同一化がおこる(cf.(2a))。カテゴリーラベルと言えばこの成員、この成員と言えばカテゴリーラベルと、典型性によって両者は強く結びついている。そのため同一化がおこり焦点推移される。最後に助数詞eは、同一性により同一化がおこる(cf.(2a))。カテゴリーラベルと個々の成員が名称において同一性が高いために、同一化がおこる。その結果焦点推移がひきおこされ、助数詞となる。

この〈縦の焦点推移〉には比喩と同様に、さらに焦点推移の方向が２種類ある。一つは〈上への焦点推移〉で、成員からカテゴリーラベルへ焦点推移がおこり、成員をカテゴリーラベルで数える。もう一つは〈下への焦点推移〉で、カテゴリーラベルから成員へ焦点推移がおこり、カテゴリーラベルを成員で数える。助数詞dは双方向あるが、助数詞cは下のみ，eは上のみの焦点推移がある。

ここで慣用性について述べたい。助数詞はそのほとんどが、慣用的に用いられる。同一化したものが固定して一体化しており、カテゴリー内で候補となるべき他成員が見えない。死んだ比喩（８）（９）と同様に、同一化されるところ以外が背景化されているからである。すでに一体化しているため、同一化のプロセス自体を感じることができず比喩らしさがなくなっている。慣用的に用いられるとき、助数詞a，c，d，eは助数詞fに、助数詞bは助数詞gへと推移していると見なす。

(13)

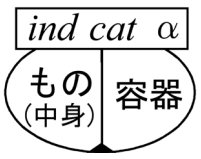
前景化	同一化	特　性	カテゴリー数	分類
カテゴリーの一部を前景化	同一化したものが固定しており、同一化プロセスが感じられない	当該成員のみ前景化	Single CF	f
		cat X のみ前景化	Plural CF	g

最後に意味と読みについて述べたい。助数詞は必ずしも一つの助数詞タイプとは限らない。通例複数の意味を持っており、それに伴い複数の助数詞タイプを併せ持つことも多い。また読みを変えることで、意味が異なることもある。以上が生成過程から見た大きな分類であるが、さらにはカテゴリーの特性などにより細かく分類される。以下タイプ別に見ていく。

５．助数詞a — Single CF、横の焦点推移（成員間）

助数詞aは、Single CFで横の焦点推移（成員間）がおこる(cf.(1))。これには基本３種類ある。一つめは、容器が助数詞となる。通例数えられないもの（主にカテゴリータイプA）を数えるために、容器に入れて数える方法になる。ここでは〈数えるもの〉と〈容器〉が一体となって、１つの個体となっている。もっと言えば〈数えるもの〉と〈容器〉を成員として持つカテゴリータイプCの個体カテゴリーになっている（(14)）。成員である[中身]と[容器]は、個体カテゴリーの成員であることから極めて近い存在と見なされ、同一視される(同一化)。そして[中身]から[容器]へと焦点推移し、[中身]を[容器]で表現する。容器が助数詞となって数える。例えば「缶詰ひと缶」の場合、容器としての缶と中身が一体となって、個体カテゴリーとなる*3。成員である[中身]と[缶]は極めて近いため同一視され、[中身]から[缶]に焦点推移するとともに、[中身]を助数詞[缶(かん)]で数える。[容器の缶]がタイプEに属する可算名詞であることから、個体カテゴリー(ind cat〈中身入り缶〉) それ自身もまたタイプEのカテゴリー成員として数えることが可能になる。これは鍋料理

(14)



を「鍋」と呼ぶ、いわばメトニミーの用法の一種になる。助数詞 a に属するものの例を(15)に示す。

(15)　桶(おけ)，貝(かい/ばい)，釜(かま)，竿･樟(さお)，梱(こり)，匙(さじ)，車(しゃ)，勺(しゃく)，升･枡(ます)，石(こく)，袋(たい/ふくろ)，樽(たる)，筒(つつ)，箱(はこ)，瓢(ひょう)，瓶・甕(かめ)，椀(わん)，叺(かます)，壺(つぼ)，籠(かご)，簀(き)，串(くし)，etc.

二つめはフレーム的カテゴリーで、〈近い成員〉が助数詞になる。これは文脈の中で近いと見なされるもの同士が同一視され、焦点が推移する。例をあげると、助数詞[客(きゃく)]は客をもてなすときに用いる道具・器物を数える。これは客をもてなす状況において、客と近くにある道具や器物を同一視し、それらから〈客〉へと焦点推移し、助数詞として数える。道具・器物は可算名詞であるが、さらに〈客〉という可算名詞(カテゴリータイプE)に置き換えることで、可算名詞の再確認を行っている。他に(16)のような助数詞がある。( )内の読みの後ろは数える対象をさす(以下同じ)。

(16)　膳(ぜん：箸)，竿・樟(さお：箪笥・長持)，戸前(とまえ：土蔵・酒蔵・倉庫)，喉(こん：魚)，床(とこ：家具)，棚(たな：体積の単位、隙間の空間も含む)，門(もん：門の飾り)，炷(しゅ：線香)，曲(きょく：屏風を折りたたんだときの面)，角(かく：公文書)，etc.

三つめは、単に〈近くにあるもの〉が助数詞となる。例えば助数詞[脚]は、蹄鉄を数える。これは[馬の脚]と[蹄鉄]が近くにあるため同一視され、焦点推移がおこり、表現の置き換えがなされている。他には(17)などがある。

(17)　郭(かく：かこいの中の地域およびその周辺)，桁(けた：数値の位取り〈桁は算盤の珠を縦に貫く棒〉)，腰(こし：腰につけるもの)，頭(かしら：烏帽子・兜・頭巾)，背(せ：馬の背に乗せる鞍)，目(もく：碁盤に配した石)，領(りょう：甲冑，十二単・羽織・打ち掛け・袈裟)，帙(ちつ：帙に入れた香物や文書)，行(ぎょう：文字列が入る空欄・罫線)，etc.

助数詞 a は、従来のメトニミーの用法に相当する物であるが、助数詞 a だけがメトニミーに相当するわけではない。別視点によって分類する必要がある。なお助数詞 a は、カテゴリータイプEがほとんであるが、重箱に入っている中身を数える[重(じゅう)：重箱に入っているもの]が「一の重」「二の重」など序数の(尺度を持った)タイプDになっているものもある。

6．助数詞 b ― Plural CF、横の焦点推移(成員間+カテゴリーラベル間)

助数詞 b は、Plural CFで横の焦点推移(成員間+カテゴリーラベル間)がおこる(cf.(６))。２つのカテゴリーの共通部分の成員同士で同一化がおこり、それに伴いカテゴリーラベル間でも同一化がおこって、焦点推移がどちらか一つあるいは両方でおこる。これには大きく５種類ある。

一つめは、行為を表すカテゴリーを重ねることによって数える。例えば、助数詞[握(あく/にぎり)]は、砂・粉・米など手に握った分量と、同量の分量を同一視する。この成員間の同一化が引き金となり、カテゴリーラベル間でも同一化がおこり、カテゴリーラベル〈握〉へと焦点推移がおこる。この〈握〉に焦点があたり、助数詞となる。そしてその分量を数えていく。他に(18)などがある。

(18)　荷(か：肩にかついだり、肩にかける荷物)，掬(きく：両手にすくえる水などの分量)，掬い(道具や手段によってすくった分量)，懸け(かけ：肩にかけてになう荷物の数量)，垂らし(たらし：容器を１秒程度傾けて垂らす分量)，担(たん：ひとりの人がになう荷物)，掴み(つかみ：片手でつかんだ物の分量)，摘み(つまみ：人差し指と親指の間でつまみあげる分量)，etc.

二つめは、重ねたカテゴリーの成員を尺度の単位にして数える。例えば助数詞［弓（きゅう）］は、弓から的までの距離を測る単位になる。ここではカテゴリー〈弓〉の成員〈弓の長さ*4〉と、同じ長さ分がまず同一化される。このことによりカテゴリーラベル間も同一視され、ラベル〈弓〉へと焦点推移がおこり、〈弓〉が助数詞となる。類する助数詞に(19)がある。

(19)　丈（じょう：成人男子の身長（「１丈」は約1.7m）），畳（じょう：部屋に敷く畳の数），尋（じん/ひろ：両手を広げた長さ），腿（あた：手のひらの下端から中指の先端までの長さ），馬身（ばしん：馬の鼻先から尻までの長さ），伏せ（ぶせ：指１本分の幅），etc.

この尺度の働きをするものに、フレーム的カテゴリーもある。(20a) は純粋にフレーム的カテゴリーであるが、(20b)は分割という行為が関わるカテゴリーで何等分かしたものが尺度になる。

(20)　a．握（あく：こぶしを握ったときの指４本分の長さ），路（じ：それだけの日数が必要な道のり），人工（にんく：職人の手間），etc.

b．割（わり：歩合・利率などの単位。10分の１），分（ぶ：ある物を10等分した際の割合の目安），厘（りん：「１厘」は１割の100分の１），金（きん：24分中に含まれる金の割合），etc.

ここでは助数詞を用いることで、名詞を可算タイプとみなしている。つまり不可算とみなされるものであってもカテゴリータイプがC，D，E，Fのいずれかと見なし、タイプが変化する。

三つめは、２つのカテゴリーの間に類似点がある場合である。これには４種類ある。まず形態の類似がある。例えば助数詞［枝（し）］は、枝と形態が似ている細長いものを数える。これは成員同士の形態が類似しているため同一化がおこる。これによりカテゴリーラベル間でも同一化が起こり、カテゴリーラベル〈枝〉へと焦点推移がおこり、助数詞［枝］として表現される。これに属するものに(21)がある。なおここには助数詞［個（こ）］など明確な形態を持たないものも含まれる。

(21)　山（やま：山の形に盛り上げたもの），本（ほん：細長いもの），葉（よう：薄く平たいもの），粒（つぶ：丸い粒状のもの），管（かん：管状のもの），玉（たま：玉状のもの），茎（けい：細長いもの），口（くち/こう：口のような形をしているもの），杯（はい：ふっくらとふくらんだ胴体・殻を持つ魚介類），輪（りん：車輪のような丸いもの），球（きゅう：球状のもの；球根），橋（きょう：橋に似たもの；虹），座（ざ：座った形のもの；高い山），etc.

次に様態の類似がある。例えば助数詞［陣（じん）］は、軍勢のように押し寄せては去る気配や殺気といった様態を持ったものを数える。成員となる様態が似ていることで成員同士が同一視され、カテゴリーラベル間でも同一化がおこる。カテゴリーラベル〈陣〉に焦点推移がおこり、助数詞［陣］となり数える。ここに入るものに(22)がある。（ ）の読みの後は同じと見なされる様態を示す。

(22)　重（え/じゅう：同じものが重なる），連（れん：連なっている），流れ（ながれ：文字列のように縦に並んでいる），周（しゅう：あまねく行き渡る），泓（おう：水がいっぱいに広がるさま（池まれに湖を数える）），星（せい：光る（信号弾などの光って落ちるものを数える）），etc.

また動作・行為における類似がある。例えば、助数詞［弾（だん）］は、次々に繰り出す企画や計画が、弾丸をうつ行為と似ているため、成員間とカテゴリーラベル間で同一化がおこる。しかし焦点推移は、成員間のみでおこる。最低でもどこか一箇所で焦点推移がおこれば、比喩とみなされることから、ここでも比喩となる。そして成員の中の〈弾〉に焦点があたり、これが助数詞［弾］になる。他に

は(23)などがある。ここには特定の行為を表さない助数詞[回(かい)]も含まれる。

(23)　差し（さし：物事が一連の動きをもって進むことから舞踊の舞を数える），跌（てつ：つまずきを表すことから、失敗を数える），掛け(かけ：掛ける行為と、もとの数字に取引価格の割合などを掛ける行為の類似)，回(かい：繰り返しおこる動作や行為を広く数える)，etc.

さらにフレーム的カテゴリーでの類似がある。例えば、助数詞[路(じ)]は、30歳代から60歳代までの10年刻みの年齢区分でもって数える。これは〈路〉と〈人生における年代〉が構造的に似ているために、同一化がおこり、カテゴリーラベル間で同一化・焦点推移がおこっている。これに類するものに(24)がある。この中には尺度をもつカテゴリータイプDも数多く存在する。

(24)　冠（かん：王室との類似で、勝ち取った選手権や優勝数を数える），年（ねん：１地球年との類似で、惑星がその軌道を１周する時間），季(き：季節との類似で、１年を単位)，次元(じげん：次元との類似で、比較対象との著しいレベルの違い)，通り（とおり：道との類似で、方法・様式の種類)，歩(ほ：歩みとの類似で、物事の進度や発達・学習段階)，etc.

四つめは関係が類似している。例えば助数詞[片(かけ)]は、大きな塊から離れた、あるいは壊れたかけらを数える。〈片〉はもともと、揃えば対となるものの一方をさす。それが壊れたあるいは離れたものとの関係が類似しているとして、成員間とカテゴリーラベル間で同一化がおこる。そして成員間において〈片〉へ焦点推移がおこり、〈片〉が助数詞となり数える。他には(25)がある。カテゴリータイプDをとるものも多い。

(25)　部（ぶ：区分けした部分)，隻（せき：隻は、対になっているものの片方)，浪（ろう：正式な所属のないまま、次の試験に備える年数)，席(せき：品評会などでの順位)，面(めん：表面で演奏したり、表示したり、勝負を行うものを数える)，次(じ：物事の行われる順番)，etc.

最後の五つめはグループによる同一化で、集合体であることに類似性がある。名詞のカテゴリータイプではタイプFに相当する。タイプFのカテゴリーを重ねることで数えるが、そこにはいろいろな条件が関わっている。例えば助数詞[組(くみ)]には、二人以上の人のまとまりを数える用法がある。この場合には〈組(タイプF＋人)〉のカテゴリーが重なり、同一化とともに焦点推移がおこり、助数詞[組]をつかって数える。他には(26)がある。

(26)　軍(ぐん:プロスポーツなどの、勝つことを目的とするチーム)，団(だん:人や物のグループ・集まり・群れ)，足(そく：両足(先)をおおう、左右が対になっているの)，etc.

また条件の中には数が含まれることもある。例えば、助数詞[対(つい)]は、２つそろって対をなすものを数える。ここには２という数が関わっている。これに類する助数詞に(27)がある。

(27)　什（じゅう：10のものが集まってひとつのまとまりを成すもの)，乗（じょう：馬４頭をひとまとまりとする単位，矢４本をひとまとまりとする単位)，両(りょう：ふたつで対になるもの)，世紀（せいき：西暦で100年を１つの年代とした単位)，番（つがい：常に連れ立っているペア)，双(そう：ペアとして扱われるもの(前後・左右・雌雄など))，etc.

７．助数詞ｃ ― Single CF、縦の焦点推移(不可分性)

助数詞ｃは、Single CFで不可分性により同一化･縦の焦点推移がおこる助数詞になる(cf.(２b))。カテゴリーが個体カテゴリーであるため、成員とカテゴリーラベルは不可分の関係にある。種類は

１種類のみで、カテゴリーラベルを成員に焦点推移する〈下への焦点推移〉だけがある。例えば助数詞[戸(こ)]は、人の住む家を数える。ここでは個体カテゴリー〈家〉と、その部分である成員〈戸〉を同一視し、〈家〉から〈戸〉に焦点推移がおこる。そして〈戸〉が助数詞となる。この場合カテゴリーラベルと成員はどちらも可算名詞であるが、助数詞[戸]を用いることで、可算名詞の再確認がなされている。他には(28)のような助数詞がある。

(28)　頭(かしら/ず/とう：人；大形の動物)*5，羽(は/わ：鳥類)，株(かぶ/しゅ：根のついた植物のひとまとまり)，脚(きゃく:脚のある道具(家具))，軒(けん:独立した家屋･民家)，口(くち/こう:人や動物)，棟(とう/むね:建物や家屋)，尾(び:屋びれのついた魚類)，翼(よく:鳥)，鱗(りん：魚)，航(かわら：船(航は船底材))，車(しゃ：車輪のついた荷台・貨車)，etc.

ここではほとんどがカテゴリータイプEに属するが、[番手（ばんて：順番に行われる物事が何番目に巡ってくるかを数える〈元々は警固の武士〉)]などカテゴリータイプDに属する助数詞もある。

８．助数詞ｄ — Single CF、縦の焦点推移(典型性)

助動詞ｄは、Single CFで典型性により同一化・縦の焦点推移がおこる助数詞になる（cf.(2a))。縦の焦点推移には方向性が２つある。１つは上への焦点推移で、〈成員〉から〈カテゴリーラベル〉へ焦点推移し、〈ラベル〉が助数詞となり〈成員〉を数える。もう１つは下への焦点推移で、〈カテゴリーラベル〉から〈成員〉へ焦点推移し、〈成員〉が助数詞となり〈ラベル〉を数える。助数詞ｄは、カテゴリーの種類に応じて、大きく３種類に分けられる。以下見ていく。

一つめは、カテゴリーが行為を表す。上への焦点推移(成員をカテゴリーラベルで表す)から見ていく。これには２つある。まず〈行為の一部〉を数えるものがある。例えば行為の対象であったり、道具や材料などを表す(例は(29))。ここでは行為の対象を数えることが多い。

(29)　掛け(かけ：ネクタイ・よだれ掛け・前掛け)，振り(ふり：振り下ろすもの・振り回すもの)，垂れ(たれ：簾・暖簾・蚊帳・幕)，架(か：屏風/飾り掲げるもの/棚・書棚)，装い(よそい：器に盛った飲食物)，提げ(さげ：手に提げて持ち運ぶ徳利・銚子)，発(はつ：爆発物)，etc.

次に〈行為の結果(できあがったもの)〉を数える。例えば、助数詞[切り(きり)]は、切ったものを数える。これに属する助数詞の例として、(30)がある。

(30)　区(く：区切った場所)，束(たば：束ねたもの)，締め(しめ：たばねたもの)，把(は/わ：野菜･線香･そうめん･薪の束)，封(ふう：書状・包物など封じたもの)，包(ほう：包んだもの)，折(おり：折り箱)，具(よろい：弓矢や硯箱などそろえたもの)，etc.

一方行為カテゴリーで、下への焦点推移（カテゴリーを成員で表す）を見る。ここでは〈何らかの行為を行うときの成員〉で、行為それ自体を数える。行為そのものを、例えば道具・体の部分が助数詞となって数えていく。これには(31)のような助数詞がある。

(31)　球(きゅう：投げた球の順番および数)，口(くち：物を口に入れたり出す回数)，刷毛(はけ：刷毛で塗る回数)，手(て:舞の手さばき)，宿(しゅく:宿の宿泊数)，針(はり:手術の縫合数)，槍（そう：槍で相手を攻撃する回数)，足（そく：両足をそろえて飛ぶ回数)，弾（だん：弾丸で攻撃した回数)，筆(ふで：墨などを筆に含ませる回数)，目(もく：目をやる回数)，etc.

これらは助数詞を使うことで、可算タイプとみなされ、カテゴリータイプEであると認識される。

二つめは、カテゴリーがフレーム的になっている。まず上への焦点推移では、〈カテゴリーラベル〉が助数詞となり、〈特定の成員〉を数える。例えば助数詞[膳(ぜん)]は、椀にもった食物(特に飯)を数える。〈椀にもった食物〉という特定の成員を、より広い意味の〈膳〉で数える。〈膳〉は、もともとは良く料理した食物、料理をさす。これに類する助数詞に、(32)などがある。

(32) 間(ま：ふすまや障子で仕切った部屋の数)，架(か：稲掛け・衣桁など)，拍(はく：拍子の中の部分)，饋(き：(もてなしのための)糧食・食事の回数)，騎(き：３人が組んで別の１人が騎乗している隊)，陣(じん：目的地に乗り込む順番)，etc.

次に下への焦点推移では、〈特定の成員〉が助数詞となり、〈フレーム的カテゴリー〉を数える。例えば助数詞[前(ぜん)]は、机・脇息・懸盤などを数える。これは〈机など〉がフレーム的カテゴリーとなり、それらが使われる位置という〈成員〉に焦点が推移し、助数詞となって数える。助数詞が用いられることで、カテゴリータイプEと主にみなされる。ここに属する助数詞に(33)がある。

(33) 口(くち/こう：切り口をつける道具)，腰(よう：腰の位置で締め上げる衣類を表し、袴を数える)，据え(すえ：家の中に据えてある用具)，席(せき：会議・会合;落語の演目)，尊(そん：仏像)，湯(とう/ゆ：温泉地)，銅(どう：銅貨)，方(かた：人を丁寧に数える)，乗(じょう：車・兵車)，間(けん：間は柱と柱の間で部屋の大きさを表し古く家を数えた)，etc.

このフレーム的カテゴリーの成員には、〈様態〉が成員となり、焦点推移のあと、助数詞になるものもある。助数詞を用いることで、可算カテゴリーと見なされる。例を(34)にあげる。

(34) 流れ(ながれ：旗・幟などの風になびくもの；水の流れ・川・小川)，朶(だ：木の枝についている花ぶさや、雲・山のかたまり)，反(たん：刺し網・船の帆)，etc.

三つめは、行為やフレーム的といったものではなく、普通のカテゴリーになる。まず上への焦点推移は〈カテゴリーラベル〉が助数詞となって、〈典型的な成員〉を数える。例えば助数詞[岳(がく)]は、景勝地や登山地として有名な山を雅語的に数える。〈岳〉がもともとは険しい山を表すことを考えれば、険しい山の中で典型的な成員(景勝地や有名な登山地)を数えていると考えられる。ここでは主にカテゴリータイプEになる。他の助数詞に(35)がある。

(35) 艇(てい：主に競技用のボートやヨット)，套(とう：和装の書物を包む覆い(帙))，ヒ(ひ：短剣・懐剣)，図(ず：理解のための挿絵など)，個体(こたい：研究対象となる生物)，etc.

次に下への焦点推移では、〈典型的な成員〉が助数詞となって、〈カテゴリーラベル〉を数える。例えば助数詞[飯(はん)]は、食事の回数を数えるときに用いられる。飯自体は食事の典型的な成員であり、それを助数詞として、食事自体を数える。これに属する助数詞には(36)がある。

(36) 蹄(てい：ひづめのある動物)，枝(えだ：花・実・葉などがついた枝)，汁(じゅう：汁物の品数)，名(めい：人)，軸(じく：巻物・掛け物・軸に巻きつけた糸)，女(じょ：娘の数)，男(なん：息子の数や男児の出生順)，斤(きん：食パンの塊)，貫(かん：握り鮨)，etc.

助数詞ｄでは、カテゴリーが行為や様態を表すものまであり、助数詞自体が可算のカテゴリータイプを必ずしも表していない。これは助数詞の形態をとることで、可算名詞化すると考えられる。つまり助数詞があれば可算名詞のカテゴリータイプであるとの推測から、可算のカテゴリータイプの読みがでる。助数詞によって、カテゴリータイプが可算タイプへと推移したと見なされる。

９．助数詞ｅ — Single CF、縦の焦点推移（同一性）

助数詞ｅは、Single CFで同一性により同一化・縦の焦点推移がおこる助数詞になる（cf.（２a））。同一性とは、カテゴリーラベルと成員が名称においてほぼ同一のものをさす。名称の同一性によりカテゴリーラベルと成員が同一視され、焦点推移がおこる。焦点推移は〈成員〉から〈カテゴリーラベル〉への上への焦点推移のみで、〈成員〉を〈カテゴリーラベル〉に置き換え、〈カテゴリーラベル〉を助数詞として数えていく。これには大きく３種類に分けることができる。まず一つめは、成員名がそのまま、カテゴリーラベルになっているものである。例えば助数詞［人（にん）］は、人を数える。成員の名称とカテゴリーラベルの名称が同じになっている。他に(37)などがある。

(37)　作品（さくひん），樽（たる），単位（たんい），店（てん），文字（もじ），文節（ぶんせつ），列（れつ），泉（せん），線（せん），語（ご），穴（けつ），国（こく），歯（し），月（げつ/つき），文（ぶん），箱（はこ），癖（くせ），銃（じゅう），試合（しあい），斑（はん），票（ひょう），株（かぶ），etc.

(37)はカテゴリータイプEであるが、(38)のように序数となっているカテゴリータイプDもある。

(38)　月（がつ），次元（じげん），周年（しゅうねん），時限（じげん），塁（るい），etc.

二つめは名称の一部を省略し、カテゴリーラベルとするものがある。例えば助数詞［作（さく）］は、作品を数える。〈作品〉の一部が、カテゴリーの名称となっている。このときラベル名を単純にすることで、含まれる成員の種類が増えることもある。例えば助数詞［館（かん）］は、博物館・水族館・美術館などを数える。「館」と省略したものをラベル名にすることで、より多種の成員を含みこんでいる。他には(39)などがある。

(39)　院（いん：病院；寺院），園（えん：庭園・農園・果樹園他），校（こう：小学校・中学校・高等学校他），社（しゃ：神社；会社），槽（そう：水槽・浴槽・洗濯槽），堂（どう：聖堂・礼拝堂・講堂他），洞（どう：鍾乳洞・洞穴），灯（とう：電灯・ガス灯・街灯他），誌（し：雑誌），局（きょく：郵便局），季（き：季節），盗（とう：野球の盗塁数），etc.

三つめは成員の一部（サブカテゴリー）を、カテゴリーラベルで表す。これは〈サブカテゴリー〉から上位〈カテゴリー〉へ焦点推移したものになる。助数詞はカテゴリーラベルの中でも、一部のサブカテゴリーを数える。例えば助数詞［山（さん）］は、山の中でも、景勝地や登山地の山を数える*6。山すべてではなく、その一部（サブカテゴリー）を数えるために助数詞が用いられる（類例は(40)）。

(40)　河川（かせん：特に、氾濫した河川），話（わ：説話（物語・民話・神話・伝説など）），者（しゃ：行為当事者・該当者），言（こと：挨拶・訓辞・祝辞・弔辞他），節（ふし：竹や葦などの茎にある節），機（き：飛行機；誘導装置を持つミサイル），邸（てい：立派な屋敷），etc.

なお助数詞ｅの３種類には、各々行為を表すものもある。一つ一つの行為を成員とみなし、その名称であるカテゴリー名を用いて数える。例えば助数詞［折（おり）］は折り重ねる回数を数える（(37)の類例）。また助数詞［別（べつ）］は別離の回数を数え（(39)の類例）、助数詞［担げ（かたげ）］は天秤棒などで物を担ぐ回数を数える（(40)の類例）。他には(41)のような例がある。

(41)　刷（すり：印刷物を刷った回数），刺し（さし：対象を刺す回数），打（だ：得点打の回数），投（とう：砲丸投げ・円盤投げなどでの試技回数），入（しお：染める物を染料に浸す回数），泊（はく：旅中の宿泊数），犯（はん：刑罰を受けた回数），通し（とおし：印刷機に紙が通る回数），etc.

助数詞ｅはほとんどがカテゴリータイプＥの再確認である。とはいえ(41)のような場合は、助数詞を用いることでタイプＥへの推移がおこったと見なされる。

10. まとめ

本稿では助数詞が、比喩表現の一種であると主張した。どちらも２つのプロセス（同一化と焦点推移）がカテゴリーを通して起こるからである。そして助数詞を焦点推移・同一化・カテゴリー数の観点から５つに分類した。この分類はさらに細かく分かれるが、すべて２つのプロセスをもとに生成されることを確認した。そして可算であるために、名詞のカテゴリータイプが深く関わっていることも見た。

注

＊[1]同じと見なされるものは通例、より目立つものであって、他と区別するときに際立つものである。

＊[2]固有名詞は４種類あると考える。詳細は緒方(2009)を参照のこと。

＊[3]缶は中身が入っているものを数え、中身が入っていない空き缶は「個」でも数える(cf. 飯田 2004：336)。

＊[4]この弓の長さは、半弓の長さと思われる。ちなみに６尺で１弓になる。

＊[5]通例人間より大きい動物は［頭］、人間より小さい動物は［匹］で数える（飯田 2004)。これは大きいと個体カテゴリーになっており、部分がよく見える。そのため一番目立つ〈頭〉に焦点推移する。一方小さいと全体しか見えず、［匹］が使われると思われる。そのため専門的な実験対象だったりすると、成員がよく見えるので個体カテゴリーとなり、小さくとも［頭］で数えたりする。

＊[6]助数詞ｅのサブカテゴリーの種類は、助数詞ｄと典型性の観点で連続している。典型性自体が主観的なものであり、典型性が強いとみれば助数詞ｄ、弱いと見れば助数詞ｅになる。

参考文献

Aikhenvald, A. 2003. *Classifiers : a typology of noun categorization devices.* Oxford University Press, New York.

Denny, P. 1976. "What are noun classifiers good for?," *CLS* 12, 122-132. Chicago Linguistic Society, Chicago.

Downing, P. 1996. *Numeral Classifier Systems : The Case of Japanese.* John Benjamins, Philadelphia.

飯田朝子. 2004.『数え方の辞典』小学館.

井上京子. 1999.「助数詞は何のためにあるのか」『言語』28(10), 30-37. 大修館書店

Matsumoto, Yo. 1993. "Japanese numeral classifiers : a study on semantic categories and lexical organization, " *Linguistics* 31, 667-713.

水口志乃扶他. 2009.「特集 助数詞・類別詞について考える」『日本語学』28(7), 4-57.

緒方隆文. 2009. "Articles as Categorical Markers,"『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第４号，1-18.

————. 2011a.「限定詞とカテゴリータイプ」『筑紫女学園大学･筑紫女学園大学短期大学部紀要』第６号，41-53.

————. 2011b.「メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ」『年報』第22号，115-129. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部　人間文化研究所.

西光義弘，水口志乃扶. 2004.『類別詞の対照』くろしお出版.

（おがた　たかふみ：英語学科　教授）